



※ちえなっぷは「CHIN UP・前を向いて」の意味です

《特集》

アーチル発達障害特別講座から

「重症心身障害者の地域生活の今後を考える」

「行動障害を抱える方への支援ネットワークを考える」

《かけはし》

大人になった私たちの居場所

地域活動推進センターの見学会を行いました！

■ 出会い、気づき、そして次へ

建設に関わった南部アーチルに今年4月に配置となり、感慨深いものがありました。一館体制では対応が困難になり、計画を少しでも早めて、出来るだけ便利な場所に整備するために用地探しや関係課との調整など当時のことが懐かしく思い出されます。

あれから3年半が経ち、法律も障害者総合支援法に変わり、事業所等の地域施設の数も増加し、地域で暮らしやすくなっています。それでも、社会参加をするための資源や仕組みはまだ不足し、社会的障壁も多く残っています。

ハード面の整備や仕組みづくりはすぐに出来なくとも、私達の意識は変えられるのではないのでしょうか。たとえば、本人の視点に立った支援をと言いつつも、本当に私達は理解しているのでしょうか。言葉を発しない人の心を読み取っているのでしょうか。良かれと思っての支援が、本人には苦痛でトラブルのきっかけになってないのでしょうか。当たり前と思っていたことが、本当にそうなのか考えさせられる話を聞き、常に自分を見つめ直すことの大切さを再認識しました。

また、自分には無理、誰かがやってくれるとあきらめていないのでしょうか。無理して続けることは無いのですが、変わることを信じて、私達が出来ることから少しでも前に進んでいくことが地域やまちを変える始まりになるはずです。一人でも多くの人とつながり、あきらめずに変えたいと思い続けていくことが大切だと、改めて気づかされました。

この2つの気づきは、7月と9月にアーチルが行った特別講座での話からです。本来のテーマとは少し違うところではありましたが、思いを新たにし、力をもらえました。今回の『ちえなっぷ』では、その講座の内容を特集でお伝えします。

南部アーチル所長 佐々木 和典



作品名

「ホイッスルを吹く少年」

齋藤 俊希さん作

(作者のコメント)

最近のサブカルチャーに見当たらない、大人びた印象を持つキャラクターを表現しました。

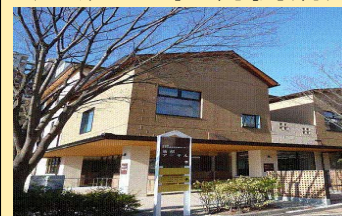
※本作品はパソコンのCGソフトを用いて作成されています。



北部アーチル
(平成14年4月開所)



南部アーチル
(平成24年1月開所)





「アーチル」とは「アーチ (arch: 橋)」と「パル (pal: 仲間)」とをかけたもので、センターが障害者と市民の「架け橋」になるようにとの願いを込め、市民公募によってつけていただいた愛称です。
このコーナー「かけはし」は、読者の皆さんとアーチルが双方向で情報交換できるよう、皆さんや職員からのメッセージなどを掲載していきたいと思っております。



地域活動推進センターの見学会を行いました！



ものづくりに力を入れています。

和やかな雰囲気ね。
うちの子供にいいな。

説明がていねい。
分かりやすい。

面白そう。僕も
やってみたい。

見学会の様子 アクティブ・デイ (宮城野区)



<活動内容>

就労前支援 (ものづくり・パソコン等)、余暇活動支援、生活支援を行う。アットホームな雰囲気。

<地域活動推進センターって？>

今回ご紹介する3つの地域活動推進センターでは、知的障害のない成人期の発達障害者を対象に、小集団または個別での日中活動を行いながら、自己理解や自尊心感情の回復を促し、社会参加や就労への意欲を高める支援を行っています。職業訓練中や、就職した後も、余暇活動や定着支援としての継続利用が可能です。

事業所ごとに特色のある支援プログラムを行っており、個々人の特性や段階に応じた丁寧な支援を行っています。

ご利用にあたって障害者手帳や医師の診断書は不用です。まずはアーチルへご相談下さい。

※ご利用には各センター規定の利用料が必要になります。

泉区・若林区のセンター



ほっとスペース 歩
(泉区)

<活動内容>

就労体験 (食器洗浄・メール便・弁当配達等)、日常生活支援 (調理・ソーシャルスキルトレーニング等)、余暇活動。就労移行支援とも連動する。



ここねっとデイ
(若林区)

<活動内容>

日中活動 (就労前支援・生活支援等の各種支援)、余暇活動、トークセッション等、曜日ごとや特定の日程で様々な活動を行う。

自信を回復し、それぞれの
目指す生き方へ

まずは自宅以外の
場所でも安心して
過ごせることから

少人数集団への参加
活動プログラムへの参加

自己評価 (自信) の向上

社会参加の促進

この広報紙の
お問い合わせ先

(発行元) 仙台市北部発達相談支援センター
〒981-3133
仙台市泉区泉中央2丁目24-1

TEL:022-375-0110 FAX:022-375-0142
e-mail:fuk005410@city.sendai.jp
ホームページは→

アーチル で 検索

【重症心身障害編】平成25年7月27日、仙台市障害者総合支援センター（ウェルポートせんだい）で、「重症心身障害者の地域生活の今後を考える」というテーマのもと、当事者ご家族から子育てに対する思いと、支援者に対する要望をお話いただきました。その後、県外からお招きした2名の講師に、それぞれの事業所での取り組みについてお話いただきました。（以下の内容は、当日の講話から一部を抜粋して掲載したものです）

重症心身障害者の地域生活の今後を考える

～医療的ケア対応のケアホームから～

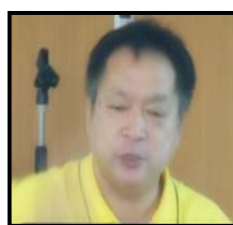
北海道伊達市での先進事例

伊達コスモス21
サポートハンズころころ
所長 畠山 隆子 氏



重症心身障害者の地域生活

びわこ学園障害者支援センター
所長 田村 和宏 氏



制度は後からついてくる

畠山氏:ケアホーム『野ぶどう』開設のきっかけは、伊達肢体不自由児者父母の会からの「伊達市のノーマライゼーションは本物ですか?」「私たちの子どもには、養護学校卒業後に通う場もない、住まいもない!」という言葉でした。その言葉に答えるべく、まずは日中活動の場の創出と多機能型への拡充に取り組みました。そして、その次に取り組んだのが、医療的ケアを必要とする重症心身障害者が利用できるケアホームの開設でした。『野ぶどう』で大切にしていることは、どんなに障害が重くても、「誰もが住みなれた地域で暮らしたい」という当たり前の思いを受け止めることです。ニーズを受け止めることが先で、必ず制度は後からついてくる。そういう思いで取り組んでいます。

ケアホーム「野ぶどう」の特徴

- ・ホームヘルプサービス導入による支援
- ・支援員による医療的ケアの実施と訪問看護との連携
- ・かかりつけ医による定期健診(歯科・整形外科を含む)
- ・訪問リハビリテーションの積極的な導入
- ・保健師と栄養士との定期的な情報交換

保護者からのメッセージ

- ◎人間らしく、品位を重んじて接して欲しい。尊厳も品格もある人間として尊重されることで、信頼しあえる仲としてのコミュニケーションが成立すると思います。
- ◎将来は「地域」での生活を希望します。近いと気軽に行けて、ちょっと具合が悪い時についているとか、泊まったりもできます。罪悪感もあるし、寂しさも少しは減ると思います。
- ◎これまで大切にしてきた言葉があって、「この子が20歳になったとき、どんな大人になって欲しいか考えて育てなさい」と、お世話になった先生から言われました。それを聞いて「①笑顔②YES-NOがいえること」をずっと目標にしてきました。このことを小さい子どものお母さんや、支援する職員の方にも考えて欲しいです。

「ふるさと」になる暮らしづくりを

田村氏:入所施設であるびわこ学園が『ケアホームと暮る』を始めた背景は、在宅で暮らす重症心身障害児者の加齢と、親の高齢化で入所待機者が増えたことでした。それまでも待機者の対応として、地域の受け皿づくり(短期入所事業の充実、ヘルパー利用、日中一時支援等)は進められていましたが、それだけでいいのか?という思いがありました。改めて「何が求められているのか」ということを出発点に取り組むことにしました。そして、重症心身障害児者の「自立」に向けて、日中活動と生活の場を用意しながらも、それらをその人の歴史と結びつけて支えるという考えに至りました。「故郷」はまさに生まれた場所。それに対して「ふるさと」は心の安らぎや、ありのままの自分でいられる場所を表します。心がやすらぎ、ありのままの自分でいられる暮らしの支援に取り組んでいます。

重症心身障害者のケアホームに必要なこと

- ・「その人」の「暮らしのかたち」を描くこと
- ・暮らす場の選択ができるようなハード整備
- ・必要に応じた複層的な支援体制
- ・医療機関とのネットワーク
- ・医療的ケアの実施とバックアップ体制

【行動障害編】平成25年9月28日、仙台医師会館で、行動障害を抱える方の地域での生活支援を考える機会として、アーチル発達障害特別講座(行動障害編)を開催しました。激しい行動障害のために、地域での生活が困難になってしまった方々のご相談が、アーチル開所当初から日々寄せられています。行動障害を予防するため、また行動障害があっても地域で安定して生活していくため、支援ネットワークの充実とシステム作りが求められています。

第一部:基調講演「行動障害を抱える方への支援ネットワークを考える」

行動障害が起こる背景や、支援を受けて本人が変化していく様子を、実際の映像と合わせてご講話いただきました。また、ご自身が支援するうえで大切にされてきたことを、下記の通りお話いただきました。

「支援者の関わりで本人の姿は大きく変わる。支援者は常に本人に誤学習させない関わりを意識していく必要がある。」

「本人が一番の先生。事業所、種別を越えて支援を検討する場を設けていくことで、地域全体の支援の質を上げていくことができる。」

「家族を限界まで頑張らせる社会は冷たい社会。孤立を認めない社会へ変えていく、という視点を持つことが大切である。」

(野口教授は、福岡の地で長年に渡り地域生活に密着した支援を実践され、現在も支援者のネットワーク作りや、新たな社会資源の創出に貢献されています)



西南学院大学 教授
野口 幸弘 氏

西南学院大学 人間科学部教授。筑波大学 文部技官、障害児者施設の施設長を経て現職。強度行動障害を持つ人の地域生活支援に取り組む。主な著書に「行動障害の理解と援助」などがある。

第二部:シンポジウム

「地域の支援者が果たしていく役割、ネットワークのあり方について」

地域の3人の支援者の方をシンポジストにお招きし、それぞれの立場から日々感じていること、支援者に伝えたいことについてお話いただきました。



せんだんの杜 遊杜家
安齋 昭博 氏

我々は子どもの放課後支援を担っています。子どもを中心に学校や他の支援者たちと繋がれば、子どもの生活全体や将来を見据えて必要な支援が明確になってきます。

ピース・スマイルなのはな
遠山 裕湖 氏

相談のなかで、「もう限界です」といった家族の言葉を聞いたり、追い詰められて家庭内暴力をしてしまった本人を見ていると、そうなる前の段階でしっかりと本人家族のニーズを捉え、支援に繋げていくことが大切だと感じます。

第二自閉症児者相談センター
なないろ
門田 優子 氏

成人入所施設での経験から、行動障害の背景には、本人に合った支援がなされなかったがゆえの、人に対する不信感があります。予防のためには、障害特性を踏まえた24時間の生活全体を考えた支援が必要です。現在、この視点からの相談支援と「行動障害に対応できる支援者養成研修会」を行っています。

今回の特別講座には、乳幼児期から成人期まで様々な年代の方に関わる支援者にご参加いただきました。講座終了後も多くの方が会場に残り、積極的に情報交換を行って下さいました。アンケートでは、「元気をもらった」と前向きなご感想もたくさんいただきました。アーチルとしては、今後もこうした支援者の方々と手を取り合い、一緒に行動障害を抱える方と、そのご家族が安心して地域生活を送れるようなシステム作りをさらに進めていく必要があるとの思いを強くしました。わたしたちが目指すべき方向性を再確認させていただく貴重な機会となりました。